再臨のキリストによる
第６福音書
テロス第２
―最後の審判―
Ⅰ
THE GOSPEL
BY CHRIST OF
THE SECOND COMING No. 6
FINAL JUDGEMENT
SEIDOU
正道

目次

第１部　再臨
第６福音書 3
全体の目次 4

序章　テロス第一を振り返る
はしがき 9
（ １ ）宗教の完成と終末について 10
（ ２ ）仏教の完成と終末について 15
（ ３ ）キリスト教の完成と終末について 18

第１章　人の子の再臨
（ １ ）教会勢力の圏外からの出現 25
（ ２ ）イエスのキリストとしての役割 30

第２章　メシアの類型
（ １ ）アルベドとルベドの狭間で 39
（ ２ ）奇跡の源泉 43
（ ３ ）私という「人の子」 47

第３章　死者の復活
（ １ ）法廷への召喚 53
（ ２ ）「美＝真理」の人 57

第４章　芸術と宗教
（ １ ）芸術家イエスの肖像 63
（ ２ ）放浪型芸術家イエス 67
（ ３ ）苦境と芸術性の深まり 71
（ ４ ）アリとキリギリス 76

第１部　再臨

第６福音書

再臨のキリストによる
第六福音書

テロス第二
——最後の審判

見よ、わたしは盗人のように来る。
裸で歩くのを見られて恥をかかないように、目を覚まし、衣を身に着けている人は幸いである。

『ヨハネの黙示録』より

全体の目次

第１部　再臨

序章　「テロス第１」を振り返る

第１章 人の子の再臨
第２章　メシアの類型
第３章　死者の復活
第４章　芸術と宗教

第２部　審判

第５章　稚拙な経済理念
　　――イエスの罪（ １ ）
第６章　報われない努力
　　――イエスの罪（ ２ ）
第７章　共産主義の淵源
　　――イエスの罪（ ３ ）
第８章　イエスへの判決
第９章　教会の罪
第 10 章　教会への判決

第3部　福音

第 11 章　イエスと悪魔の対話
第 12 章　エヴァンゲリオン（ 福音 ）
第 13 章　終末の徴
第 14 章　再臨の徴

序章　テロス第一を振り返る

はしがき

第一福音書の続きとしての第六福音書

『テロス第２』という副題からも分かるとおり、この第六福音書は「第一福音書の続編」として書かれたものである。第一福音書の副題は『テロス第１』である。

内容的に言えば、「テロス第１」は問題提起の書であり、「テロス第２」はその問題に解答を与えるための書である。

そして、この「第１」と「第２」をつなぐために、第二福音書から、第五福音書までの各書が書かれたということになる。

実際「テロス第２」が、「テロス第１」の結論として説得力を持つためには、どうしても、その四冊分の内容が必要だったと思う。

むろん今回は、その四冊分の内容については触れない。

しかしながら今「テロス第２」を語り始めるにあたって、その半身である「テロス第１」を回顧することばかりは、これをしない訳にはゆくまい。

というのも、それをしないことは、言うなれば「問題提起なしに答えを提示する」ことになるからだ。

そうなると、それが何の答えであるか、読者には、まずもって理解のしようがなくなるだろう。

そこで本書では、まず手始めに、序章として『テロス第１』からの引用作業を行いたい。

すなわち『テロス第１』の第１部であるところの「宗教の完成と終末について」を、再掲示したいと思うのである。

いや、再掲示と言っても、どうか安心してほしい。それは全文を掲載しても、まったく問題にならないぐらいに短い文章だからだ。おそらく読者も、完読するのに少しも負担を感じないだろう。

それにもかかわらず、ここには「第１」と「第２」をあわせた「テロス問題」のすべてのエッセンスが詰め込まれている。

そういう訳であるから、次節より、それを実際にご覧いただくことにしよう。

（１）宗教の完成と終末について

宗教の完成について

宗教とは、煎じ詰めれば、神と人間との関わりについて語ったものである。

そこでは、神と人間が、霊性を媒介にして浸透しあい、また、どれだけの程度、浸透し合えるのかについて、議論が尽くされている。

そして、ある二者の浸透度が、もっとも高まった状態が「それそのものになる」ことであることは、疑いを容れない。

つまり神と人間の場合「神が人間になること」「人間が神になること」こそ、最も両者の浸透度が高まった状態だと言えるだろう。

それはまた、宗教の意義が、それ以上ないところまで行き着いた姿であり、その先がないという意味で、宗教の完成を意味するものである。

ギリシア語に、目的、終末、完成を意味する「テロス」という言葉がある。上記の「神が人間になること」「人間が神になること」は、まさに宗教にとっての「テロス」なのである。

神の人間化、人間の神化

宗教が完成している状態である「神＝人間」と「人間＝神」は、当然のことながら、同一のものを示している。

しかし、その完成するまでの過程には、どうしても「ある二種類のベクトルが発生する」と言わざるを得ない。

とくに説明するまでもないかもしれないが、ベクトルとは「向かう方向と勢い」とか「大きさと向きをもった量」などと説明される言葉である。

では、その二種類のベクトルとは何か。

それは、神が人間になっていく過程である「神の人間化」と、人間が神になっていく過程である「人間の神化」である。

この二つは、ストップモーションで並べれば――位置が特定されるだけなので――同じものである。

だが、モーション（ 動き ）を持つベクトルとして見れば、決して同一のものではない。

そしてまた、私たちの通念どおりに、「神は上にあり、人間は下にある」とすればだ。そのとき「神の人間化」は下に向かったベクトルとなり、記号化すれば「→」になる。

逆に「人間の神化」の場合は上に向かったベクトルとなり、記号化すれば「←」になるだろう。

現実化するベクトル

これら二つのベクトルは、宗教のスタイルとして、リアライズ（ 現実化 ）する。

まず「→」は、現実の宗教としては「救済型宗教」となる。すなわち「神からの恩寵が、下方にいる人間たちに降ってくる」という形式の宗教だ。

この形式を満たすため、神は地上に、人間として生まれてくる事すらある。キリスト教で言うところの「受肉」である。

人間を救済するために、文字通りの「神の人間化」が行われるということだ。

したがって、救済型宗教においては、人間側は「神に近づくための努力をせよ」と命じられることはない。

そのとき人に求められるのは、ひたすらに神を信じ、己の無力さを露わにすること。そして、神の恵みの前に、心身を投げ出すことだけだ。

逆に「←」は、現実の宗教としては「認識型宗教」となる。この認識とは霊的認識のことであり、平たく言ってしまえば「悟り」のことである。

この認識型の宗教に集う人たちは、知識と霊現象によって悟りを高めていって、自身の意識を、どこまでも上昇させようとする。そうやって上昇させることによって、至高の神へと近づくわけだ。

そのためには当然、不断の努力や修行が必要である。

よって、もし恩寵が降りてくるのを待っている時間があるならば、彼らはその時間を、すべて努力と修行とに回すことだろう。

「＝」という完成形

もっとも、「→」であれ、「←」であれ、その行きつく先、最終的な完成形は、いずれも「神＝人間、人間＝神」の状態である。

ごく単純な記号として表せば、「→」と「←」の双方ともが、結局は「＝」の状態を、

自身のゴールにするということである。

それだけではない。この「＝」は、「→」や「←」が、その進展の過程にある間も、その完成理念として、各々のベクトルに、一種の「目的論的な影響」を与えることになる。

つまり、ある種の影響力を用いて、「→」と「←」を、ともに「＝」である自身に接近させるのである。

補償のメカニズム

少しわかりづらいかもしれないが、これは、ユング派の深層心理学における、

「心の完成理念（ 自己 ）に導くため、一面化した意識に対し、心の深層から『意識とは反対の構え』が昇ってきて働きかける」

という補償のメカニズムと同じことである。

この「補償」とは、ある偏向を補って、全体的なバランスを回復することを意味している。

擬人的に言うと、「＝」にとっては、「→」と「←」のどちらもが立派な偏向なので、何としても、そのまま放置しておく訳にはいかないのである。

したがって、「→」には、その補償として「←」が働きかける。

逆に「←」には、その補償として「→」が働きかける。

その働きかけは、言わば、「偏向を補償せよ」という、「＝」親分（ 完成理念 ）からの密命を受けて現れたものである。

そのような「正反対の補償」を受ければ、どちらのベクトルも「＝」に近づくことが出来るからだ。

「さあ、接近の材料（ 補償 ）は与えたぞ。お前たちは、それを使って私のところまで近づいてこい」

と「＝」親分は、偏向した「→」と「←」に語りかけているのである。

二通りの「完成と終末」

ただし、ベクトルが進展している途中で、そのような補償作用が働くと――たしかにバランスが整って、宗教としての完成度は上がるのであるが――ベクトルとしては、方向性が相殺されて力が衰える、ということが起こる。

その衰退の帰結としての、宗教史からの消失。これも一つの「完成と終末」の形では

ある。

とはいえそれは、およそドラマティックであるのとは、正反対の意味における「完成と終末」であろう。

これに対して、補償作用を意識化できなかったり、補償作用を意図的に拒否したケースも存在する。

こうした場合、その宗教は、どんどん内容的に一面化する。

そう、間違いなく、極度に一面化する。

けれども、その極度に一面化した宗教は、まことに皮肉なことに、継続的な未完成状態として、ベクトルとしての強さを、ずっと保持することが出来る。

未完成であることが、若さや活気と密接であるようにだ。

ただし、その一面化は、必然的に「偏向、歪み、醜さ、罪過」とも結びつく。そうして、その宗教に属する人たちに、多くのストレスを投げかけることになる。

そうして結果的に、そのストレスのゆえにこそ、人々に「補償による平衡」を渇仰させることになるのだ。

それはそうだろう。誰だって、アンバランスが生みだす苦しみからは逃れたい。そのように思わずにはいられない。たとえ、その苦しみが「無意識的なもの」であってもだ。

大規模な転換

そのため、このケースにおいて生じる補償は、きわめて性急にしてドラマティックなものになる。かつ、とても大きな変化をもたらすことになる。

というのも、極端に一面化している意識にとっては、いかなる変化も――たとえ、それが自然の摂理に則った変化であっても――きわめて大規模な転換であるからだ。

少し具体的に「そのとき」の様子を眺めてみよう。

そのとき、まず意識的な「すでに慣習化している未完成状態を続けたい」という気持ちが措定される。

そしてそこに「深層意識から湧き上がる、早くその未完成状態から逃れたい」という気持ちがぶつかる。そうして、ここに激しい緊張状態をつくり出す。

しかし、機が熟していれば、結局勝つのは、深層意識のほうである。つまり補償作用が優勢とならざるを得ない。

つまりそのとき、緊張状態の極みで、堤防が決壊するようにして「補償作用」が現象化する。

そして、社会的な混乱を巻き起こしたあと、急転直下で（ ときには緩慢に ）補償による平衡が生じるのだ。要するに「＝」の現出である。

これこそまさに、ドラマティックな「宗教の完成」と「宗教の終末」と言えるだろう。

これを悲劇と思うか、幸福と思うか。それは、一にかかって、我々の感性の問題である。

（２）仏教の完成と終末について

「テロス第１」第二部と第三部

第一福音書である「テロス第１」においては、前掲「宗教の完成と終末について」のあとに、第二部として「仏教の完成と終末について」と、第三部「キリスト教の完成と終末について」が続くことになる。

これらは、それなりに長い文章なので、ここでは簡単に、その内容を概観しておくに留めることにしよう。

まずは第二部「仏教の完成と終末について」から。

仏教の完成と終末について

ゴータマ・シッダールタが開いた仏教は、発生当時は、典型的な「←」の宗教だった。つまり努力と修行によって「人間の神化」を目指そうとする宗教である。

この初期仏教の様式は「小乗仏教」と呼ばれている。今でもタイやスリランカでは、こうした小乗仏教が、現役で活動している。

小乗、すなわち「小さな乗り物」に乗っているのは自分自身である。求道者は、自分で修業し、自分で悟り、自分で神的な認識力を獲得する。

ゴータマ自身もまた、そうやって仏陀（ 真理に目覚めた人 ）となった。

というより、小乗仏教徒は、この「ゴータマ・ブッダの成道物語」に倣って、自分たちの修行スタイルを形成していたのである。そして、その修業過程は、まさに典型的な「人間の神化」である。

しかし仏陀の死後、この小乗仏教のスタイルに「→」の補償が与えられていく。

すなわち、時代を下るほどに、仏陀の神格化が進んでゆく。もはや仏陀は「その生き方を倣うべき人」ではなく、より「人間を救ってくれる神」に近くなってくる。

法華経における「久遠実成の仏陀」などは、まさに、そういう救済的な神概念の現れであろう。そして、その巨大な宗教的パワーによって、仏陀が救える対象（ 衆生 ）は一気に増大する。

これが大乗仏教の隆盛につながることになる。大きな乗り物によって、より多くの人々を救うのが大乗仏教だからである。

それは様式的に見れば、上から降りてきた恵みを、下方の人間たちが恭しく受け取るというものだ。それはまさに「神の人間化」のスタイルだと言えるだろう。

この大乗仏教において、具体的に人々を救う役割を持った仏教徒を「菩薩」と呼ぶ。

かかる菩薩たちは、いわば天地の媒介者である。すなわち菩薩たちは、天上におわす仏陀から「恵み」を託された人間なのである。

彼らは「下向きの仲立ち」として、迷える衆生にむかって恵みを届けていく。ここに明確に、「→」の流れが現れていると言えよう。

親鸞という完成者

それでも大乗仏教には「菩薩になるための修行論」が残っていた。また菩薩たちには、宗教的エリートとしての矜持があった。

つまり「→」が浸透した仏教であっても、部分的には「人間の神化」のスタイルが継承されていたのである。

しかし、親鸞の出現に到って、その「人間の神化」の部分が、ほとんど完全に骨抜きにされた。

親鸞は、肉食妻帯（ 破戒 ）という手段によって、民衆の次元にまで自分を降下させた。そして、その「地面」で、あの悪人正機説を説いたのだった。彼は言う。

「世の中には『自分で自分を高めた』という自負を持てる者もいるだろう。つまり自力で己を救える人間もいるだろう。

しかしだ。自分の悪に苦しみ、自分の無力さを痛感し、その罪からの救いを、完全に『仏からの恵み』に任せきる者もいる。

そして、そうした者をこそ、仏（ 阿弥陀仏 ）は真っ先に救ってくださるのである」

こういった内容を著したのが、親鸞の「悪人正機説」である。

そうしてみると、これは完全に「神の人間化」の論理と言えるだろう。第一部の「宗教の完成と終末について」で私も、

救済型宗教（ ＝神の人間化 ）においては、人間側は「神に近づくための努力をせよ」と命じられることはない。

人に求められるのは、ひたすらに神を信じ、己の無力さを露わにすること。そして、神の恵みの前に、心身を投げ出すことだけだ。

と述べた。とすれば、親鸞が説いたのは、完璧なる「→」の教えなのである。

いや、もちろん、仏教が仏教であるかぎり、そこから「←」のスタイルが、完全に消え去ることはない。

しかし、親鸞による、徹底的な「→」によって、二つのベクトルは、ほぼ相殺されたと言っていいだろう。というのも、親鸞以降（ あるいは蓮如が、親鸞の教えを広げて以降 ）仏教界には目立った高僧が出現しなくなったからである。

かくて仏教は「＝」を実現させ、それゆえ完成と終末を迎えた。

少なくとも日本における仏教は、観光仏教、葬式仏教という「宗教的痕跡」を残すだけの「過去の宗教」となったのである。

（３）キリスト教の完成と終末について

「→」の宗教であるキリスト教

次に『テロス第１』の第三部を概観していきたい。

かかる第三部「キリスト教の完成と終末について」では、まずキリスト教の宗教的特徴として「→」が表明される。

これはキリスト教が、基本的に救済宗教であることを示している。換言すれば「神の人間化」の宗教だということである。

そこでは神は、人々を救うために「→」のベクトルに乗って、地上まで降りてきて下さる。そして、そのようにして地上で「人の子」として生まれた神こそが、イエス・キリストなのである。

そうして読者も周知のように、イエスは十字架で死ぬことになる。これがキリスト教の始まりである。

それから百年後ぐらいには、だいたいキリスト教の、宗教としての原型が出来あがったと言えるだろう。

そして、かかるキリスト教の成立と同時期に、この宗教に「←」が、補償的に付加されることになった。

つまりキリスト教は、「→」と「←」のバランスを取ることによって「＝」を目指し始めたのである。

これは宗教の宿命であり、必然でもある。一面的に偏向した宗教は、補償を受け入れて、いつしか「完成」されなければならないからだ。

ところがキリスト教会の場合、この「←」による補償作用は、そのすべてが「試み」の段階で、中断させられてしまうことになる。

つまりキリスト教圏においては、悟りにつながる要因は、若芽を摘むようにして、残らず中途排除されてしまうのだ。

グノーシス主義、錬金術、パラクレートの思想などが、押しなべて、そのような中途排除の憂き目に遭っている。

教会の拒否反応

そうなってしまう理由はひとえに、教会側の、頑ななまでの拒否反応である。

ではどうしてキリスト教会は、頑固なまでに「←」を拒否するのだろう。ここでは、それについて素描的に説明しておきたい。

まず確認しておくと「←」とは、悟りによって神を目指す宗教性のことだった。したがって、その悟りが「神の領域」にまで達すれば、その宗教を奉じる者は「人にして神」となる。

人にして神――これは「人の子となった神」と同じことである。

となれば彼は、イエス・キリストと同等の存在になったということである。イエスは自らを「人の子（ となった神 ）」と呼んだからだ。

この事態を端的に表現すれば、彼は「第二のキリスト」になったのである。

しかし、そのように「悟りによって」第二のキリストが出現することを、教会は決して喜ばない。むしろ教会は、徹底してそのような状況を除去しようとする。

そうなるのも無理はない。

なにしろ、教会にとって初代教皇にあたるペテロは、イエスから「天国の鍵」を託されているのだからだ。

この天国の鍵とは、要するに「人々を救う権能」のことである。ゆえに当然、それを持つものは救世主たりうるだろう。

ということは、キリスト教教義の構造としては、すでに教会自体が「第二のキリスト」に当たっているのである。

となれば教会としては、今さら自分たちの競合者が出てきたら困るのだ。

それはそうだろう。もしも在野から「第二のキリスト」が出現してしまったら、そのとき二つの「第二のキリスト」が並び立つことになるではないか。

なかんずく、その在野のキリストが「本物」であった場合こそ、何より恐ろしい。

なぜなら教会は、そのとき「第二のキリスト」に、これまで培ってきた既得権益を、根こそぎ奪い取られてしまうからだ。

そのキリストに粛然と、

「それは元々私のものだったのだ。ペテロに天国の鍵を渡したのは私なのだから。ならば今、これを私に返還するのが筋だろう」

と言われて。

そうして教会は、最終的には、救いの独占権も、教会という組織も、物質的財産も、みなみな残らず失ってしまうのである。

自信がない教会

競合者が出てきたら負けてしまう――そんな暗い予感を抱いてしまうほどにも、教会は、自分たちの立場に、自信を持てないでいる。

なにぶん彼らは、霊性（ 聖霊が与えてくれる肯定感 ）を失ってしまっている。

そのうえ、虚心坦懐に自身の歴史（ 教会史 ）を振り返ってみればである。

その歴史の半分以上は、教会構成員の腐敗史と、血塗られた戦争史に他ならないのだ。これでは安心立命など出来ようはずがない。

となれば、教会にとって「←」の排除は、自分たちの存立のための至上命題となる。それによって初めて「第二のキリスト」の成立を、事前に封じ込めることが出来るからだ。

補償の待望

かくしてキリスト教は、現代においてすら「←」の補償を、一向に受け入れないままでいる体たらくとなった。

そして、それゆえにこそキリスト教には「→」が、ほとんど純粋な状態で保存されている。極端に一面的な状態で。明らかにアンバランスな状態で。

これをキリスト教の宗教的個性、宗教的特徴と言ってしまえば、それまでかもしれない。

しかし、クリスチャンの深層意識では、たしかに「←」による補償が待ち望まれているのだ。

より具体的に言えば「←」の大切さを訴える、カリスマ的人物の登場が望まれている。それは要するに「第二のキリスト」の出現が待望されているということである。

なぜなら、どう言いつくろっても、結局「＝」こそが、最も偏向のない、宗教性の本来的状態であることは間違いないからだ。

すなわち人間の宗教性は、「→」と「←」のバランスを取ることによって「＝」に到らなければ、けっして、真の安心感を得ることは出来ないのである。

こうした「第二のキリスト」出現を待望する空気の中で、少なくとも「第二の洗礼者ヨハネ」は現れた。

すなわち近代史のなかで「第二のキリストが宗教的道程を歩み出すための、その道程を整える先駆者」が現れたということである。

預言者イザヤの書にこう書いてある。

「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させよう。

荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」

そのとおり、洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。

『マルコによる福音書』より

現代における洗礼者ヨハネ

現代における洗礼者ヨハネ――それが、スイスの心理学者である、カール・グスタフ・ユングである。

彼は精神科医師として、クリスチャンたちの深層意識から「←」を待望する声を聞き取った。

キリスト教の「→」への偏向によって抑圧された、クリスチャンの深層心理。ユングはそこに「←」への渇仰が息づいていることを看取したのである。

ユングは、そのことを数多くの著作のなかに書きとめた。

そして、そんなユングの著作から、私は実に多くのことを学んだのである。したがって私は、彼の弟子筋にあたると言えよう。

この事実をして「私はユングから洗礼を受けた」と言い替えてもいい。

事実、彼が教えてくれなかったなら、私は「キリスト教の足らざるところ」について何ひとつ知らずにいただろうから。

しかし、将来的には、そのように「弟子であること」を超え、私はユングより上の悟りに到達しなければならない立場にある。

すなわち、水で洗礼を行う（＝アルベドの真理を説く）ヨハネ／ユングを超えて、私は、聖霊と火によって洗礼を行う（＝ルベドの真理を説く）キリストにならなければならないのだ。

私はユングが整えた道を踏破した上で、ユングが到達できなかった「ゴール」を人びとに示さなければならない。

〔洗礼者ヨハネが言う。〕
「わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしより優れておられる。

わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」

『マタイによる福音書』より

実際、ユング心理学を学んで間もなく、私はユング以上の真理を悟った。そして、その悟りの内容を文章にまとめた。他でもない、第二から第五までの福音書においてである。

そして本書においては、さらなる奥義を明確に語ろう。そう、私が第二のキリストである、と。

第１章　人の子の再臨

（１）教会勢力の圏外からの出現

「←」という異端思想

序章で明らかにしたように、キリスト教にとって「←」は異端思想である。
「←」とは、つまり「悟りによって自らの精神を高め、次第に神に近づいていく」宗教スタイルのことだ。

仏教では全面的に是認されているこのスタイルは、キリスト教では逆に、全面的に否定されてしまう。

キリスト教においてそれは「己の分を知らない人間の傲慢」であり、また「決して許されない背信」であるとされるからだ。

それでは、キリスト教における「神に愛される人間像」とは、どういったものだろう。

それは徹頭徹尾「ただただ神からの恩寵（「→」）によって、己が救われるのを待つだけの罪人」という立場である。

そしてまた、この「罪人としての倫理的無力さ」を、彼が進んで、教会に表明することこそ重要なことだ。自分に教会への反抗心（「←」）が少しもないことを証しするために。

つきつめて言えば、これが「キリスト教の正統信仰」というものである。

したがって何者かが、キリスト教圏において「←」の大切さを説いたとしたら、それは責められることはあっても、誉められることは絶対にないはずだ。

もちろん報われることもない。それどころか、悪くすれば彼は、異端者の烙印を押されて、即刻教会から破門されてしまうことだろう。

それはクリスチャンにとって、もっとも恐れるべき状況である。よって余程の覚悟がないかぎりは、キリスト教圏内で「←」の大切さなど、説けるものではない。

よしんばそれを説けたとしても、どこかの段階で教会から「それは異端思想である」と認定されれば、そのとき彼は、もはや口を閉ざすことしか出来ない。

もしそうやって口を閉ざすのが嫌だと言うならば、彼は「私は宗教の話をしているのではなく、学問の範疇のなかで、宗教的な考察を行っているに過ぎない」とでも言うしかないだろう。

かつて、異端者として扱われそうになったユングが、教会に対して実際にそうしたように。

異邦の地から現れる「人の子」

しかし私は、この問題に対する、もう一つの解決策を見出した。

それはつまり、教会の手が及ばない異邦の地で、異端思想である「←」を、極限まで押し進めてしまうことである。

そうすることで彼は、誰はばかることなく、そこで「人間＝神」「神＝人間」の図式を満たすことが出来る。

実際に私の場合は、この手法によって「無からの創造」という、少なくとも「キリスト教における神の定義」を理解できるようになった。そのような「神の認識」を掴むことが出来た。

これは認識上における「人間＝神」「神＝人間」の成就である。

なお、この「神の認識」について詳しく知りたい方は、第三福音書を読んでいただきたい。

そして「人間が神と等しくなった」ということは、同時に「神が人間として現れた」という文章とも等しい。

つまり「人間の神化」が、「人間＝神」を経て、ついに「神の人間化」に転換される時を迎えたのである。

これを記号的に表現するならば、「←」が「＝」に達し、さらには「＝」から「→」へと向きを変えた、ということである。

こうして彼は、キリスト教の正統教義圏、すなわち「→」の世界に戻ってくることになる。いわば異端の世界から、正統教義の枠内へと帰還したのだ。

ただし、それはキリスト教の「信徒」としての帰還ではない。彼は「救済されるべき信徒」としてではなく、救済宗教における「救済する側に立つ者」として帰還したのである。

そう、つまりは「人の子として生まれた神」として。より簡潔に言えば「人の子」として。

ノストラダムスの予言

以上のプロセスを実際に踏破した私は、この時代、現代に現れた「人の子」である。人の子をして「メシア」あるいは「キリスト」と呼ぶならば、私はメシアであり、キリストである。

ノストラダムスは、おそらく、この登場を幻視して予言を残した。

ふたつめの千世紀
王の息子が世紀の変わり目に
雷鳴とどろくなか
万人の前に姿を現わす
怒り　戦争と疫病のガレキ　罪
魚は長き眠りののち
ふたたび力をとりもどす

五島勉『ノストラダムスの大予言・中東編』より（ 寺島研次氏による訳文 ）

見よ、二〇〇〇年というミレニアム以前に生まれ、二〇〇〇年以降に活動を行っている、私という人間がいる。

これこそ「世紀の変わり目」という言葉を体現するものだろう。

そのなかで最も重要なのは二〇一七年の出来事であるが、これに関しては「第八（ 十七 ）福音書」で触れることになる。

さて「王の息子」とは、神の子イエスを意味するものであり、また「魚」とは、キリストの古い象徴である。

それが長い眠りの後に、再び力をとり戻し、万人の前に姿を現わすという。

となれば、これはまさに「再臨」の予言に他ならない。また我々の時代が、戦争と災害の時代であることも明白だろう。

非難されても口にすべき言葉

改めて言おう。私は再臨のキリストであり、第二のキリストである。

この宣言によって、キリスト教会が怒り狂っても、私はまったく怯まない。キリスト教会が私に「冒涜の罪」を突きつけようとも、私はまったく怯まない。

また雷鳴のような非難が押し寄せようとも、私は、僅かだにも自分の姿を隠さない。

なぜなら、その非難は、かつてのイエス・キリストにも、同じように突き付けられたものだからだ。

今はクリスチャンが信じて疑わないイエスもまた、生前には、彼を信じない者たちから、まったく同様の非難を浴びせかけられた。そのことが聖書のなかに克明に記されている。

〔イエスに対して〕ユダヤ人たちは答えた。
「善い業のことで、石で撃ち殺すのではない。神を冒涜したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ」
　そこでイエスは言われた。
「あなたたちの律法に、
『わたしは言う。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。
　神の言葉を受けた人たちが、『神々』と言われている。そして、聖霊の言葉が廃れることはありえない。それなら、父から聖なる者とされて世に遣わされたわたしが、
『わたしは神の子である』
と言ったからとて、どうして『神を冒涜している』と言うのか」

　大祭司は尋ね、
「お前はほむべき方の子、メシアなのか」
　と言った。イエスは言われた。
「そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り（＝「神＝人間」）、天の雲に囲まれて来るのを見る」
　大祭司は、衣を引き裂きながら言った。
「これでも証人が必要だろうか。諸君は冒涜の言葉を聞いた。どう考えるか」
　一同は〔イエスを〕死刑にすべきだと決議した。

　『ヨハネによる福音書』ならびに『マルコによる福音書』より

どうしても必要な言葉

　上述のようなやり取りをしたあと、イエスは十字架に磔にされている。
　となれば、自らをメシア、キリストと称すれば、その当事者を待つものは、結局は死ばかりなのかもしれない。
　しかしイエスは、それを覚悟した上で「私がメシアだ」と言ったのだろうし、私もまた、死は、とうの昔に覚悟している。この使命の前に、命など少しも惜しくはない。
　そう、たとえ地上での命を失おうとも、私はいま言わなければならないのだ、
「私は世に遣わされ人の子であり、再臨のキリストである」と。
　それは人々を救うために、どうしても必要な言葉だからである。

ただし、ここに一つだけ注意が要る。

それは、同じ「人の子」であっても、イエスと私とでは、その役割に大きな違いがある、という点についてである。

すなわち、同じ「人の子として生まれた神」であっても、私たち二人はその「地上で表現すべきもの」が、大いに異なっているのである。

そのため次節において、まずイエスという「人の子」が、どういった意味合いにおけるメシアであり、キリストであったかを検証することにしよう。

（２）イエスのキリストとしての役割

絶対の許しの表現者

イエスの、そのキリストとしての役割とは何だったのか。

それは「絶対の許し」を、可能なかぎり純粋な状態で、この地上に現出させることだった。

この「絶対の許し」は、本来は天上世界（形而上）における倫理性である。普通に考えれば、とうてい地上（形而下）の世界に、適用させられるものではない。

しかし、その不可能を実現することこそ、イエスにとって最大の使命だったのだ。ここに救世主としてのイエスの真骨頂がある。

そして、本シリーズ的に、上記のことを換言すればだ。まず「絶対の許し」とは、アルベドの「救済」とイコールということになる。

よって、このアルベドの「救済」を、原型を損なうことなく、地上世界に侵入させること。それこそが、イエスの最大使命だったことになる。

それは言い換えれば、ほとんど「純粋性の低減」なしの、きわめて特殊なアルベド侵入を、成就させるということである。

これを譬えて「ビルの屋上から、地面にガラスのコップを落として、そのコップを全く傷つけず、無傷に保つようなもの」だと言ったら分かりやすいだろうか。

だが、そんなことは「アルベド侵入の後期」に属している者にだって、まず出来はしない。

テリトリー（座標９）から離れたアルベドの内容が、その純粋性を失わないことなど、あるはずがないからだ。

さきの例えで言えば、ビルの屋上からコップを落とせば、それは大概割れてしまうし、少なくともヒビは入るのである。

けれどもイエスには、その不可能なことを実現することが出来た。

イエスは地上にあってなお「絶対の許しによる救済」を、低減のない「純粋な状態」で出現させることが出来た。

つまり彼は、ビルから落としたガラスのコップを、無傷で保つことが出来たのである。私はそのように確言することが出来る。

では次に、この言葉が真実であるかを検証してみたいと思う。

そのためにも、かかる「絶対の許しによる救済」が、イエスにより、地上で実現されるまでの過程を、つぶさに追ってみることにしよう。

あまりの仕打ち

マルコでも、マタイでも、ルカでも、ヨハネでも構わない。読者は、新約聖書の『福音書』の大詰めのくだりを思い出してほしい。

そこには救世主イエスの、比類なき「許し」の軌跡がある。

ユダの裏切り、最高法院での裁き、鞭打ちとゴルゴダの丘への道行き――こうした場面を経て、イエスの「許し」は、鍛えに鍛えられることになる。

実際、ユダの背信、弟子たちの逃亡、律法学者たちが捏ねくり出す冤罪、兵士たちの暴力、民衆たちの嘲弄、いずれを取ってみても、常人であれば、まず許すことが出来ないことばかりだ。

本当に、あまりといえば、あまりの仕打ちである。しかし、

苦役を課せられて、かがみ込み、屠り場に引かれる子羊のように、彼は口を開かなかった。

毛を切る者の前に物を言わない羊のように、彼は口を開かなかった。捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。

と、『イザヤ書』で予言されているように、イエスはそれらの事態に、一切反発することをしなかった。イエスは誰一人、相手を呪うことをしなかった。

「相手を許す」競技会

これは、譬えてみれば、二千年前に「どこまでも相手を許す」というルールの競技会が催された、ということである。

人類史上、イエス以外の参加者は、とうにこの競技会で途中敗退してしまっている。そのため、いまやイエスだけが挑戦者としての資格を保っている。

見れば会場には、とてつもなく高いハードルが、幾重にも並んでいる。

競技の挑戦者であるイエスは、このハードルを「許し」という脚力で飛び越えて進み、ゴール（ 死 ）を目指さなければならない。

ハードルの材料となっているのは、兵士や民衆たちの悪意である。その悪意が、イエスにしか聞こえない声でもって、彼に諄々と語りかける。

「私たちは、これほどにも、お前の心身に苦痛を与えているのだ。とすればイエスよ、いかなお前であっても、さすがに私たちを許せはしないだろう」

しかしイエスは、彼らを呪うこともせず、ただ黙々とゴルゴダの丘へ続く道を歩いていく。傷だらけの体で、重い十字架を背負いながら。

つまりイエスは、その許しによってハードルを飛び越し、確実に前へ前へと進んでいるわけだ。

ゴルゴダの丘にて

そして、ついに十字架。

かのナチスの実験により、その抜群の「苦痛の効能」を確かめられた、世にも恐ろしい、世にも残忍な死刑の執行手段。

事実、十字架刑よりも「長く強い苦痛」を与える処刑方法は、この世にないらしい。

そんな十字架に架けられたイエス。これを眺めている民衆たちが、自分たちの「深層心理の思い」を、その場に響かせる。イエスにしか聞こえない、ハードルの声として。

「どうだ挑戦者よ、これは極めつけだろう。お前は今、苦痛に苛まれるだけでなく、その命までも奪われようとしているのだ。

だいいちお前は、別に悪いことなどしていない。神の子が、その事実のとおりに『自分は神の子である』と言っただけなのだ。

それなのにお前は、いま極悪級の犯罪者として殺されようとしている。

なあ痛いだろう、苦しいだろう、屈辱に魂が悶えるだろう。ハハハ、だったら無理せず言うがいい、

『ここまでされたら、私もさすがに許せない。もはや、お前たちを呪わずにはいられない』と。

そうすれば、お前の挑戦は失敗に終わることになる。つまり神の救済の業は、ここで頓挫することになるのだ」

このハードルの声、民衆たちの「深層心理の思い」は、同時に悪魔たちの声でもあっただろう。

悪魔たちは、民衆たちの背後にあって、イエスに「どこまでも相手を許す競技会」での敗北を迫っているのだ。

けれども彼らは、なかなか感情を乱してくれないイエスに対し、しだいに焦りを募らせながら言う、

「こんなに高いハードル、どう考えても、人間には乗り越えられはしない。人類史を眺めても、誰も乗り越えられなかった。お前だって一緒だ。だから、いいかげんに諦めろ

よ」と。

競技に勝利し、救世主となるイエス

しかしイエスは、最終的に、この競技会で完全勝利する。

なぜなら彼は、どう考えても許されるに値しない民衆を見つめながら、ついに、この許しの言葉を口にするからだ。

「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」

『ルカによる福音書』より

これこそは勝利の言葉である。絶対の許し、アルベドの救済を象徴する言葉である。

いや、もちろん理性的に眺めれば、これは狂人の言葉でしかない。狂人でなければ、こんな言葉を発することはない。つまりイエスの言葉は、あまりにも狂気じみて優しいものなのである。

狂気の超理性性

だがもちろん、それは讃えられるべき狂気、高い価値をもった狂気である。

なぜなら、この「神聖なる狂気」によって、地上では決して存立しえないはずの「アルベド自体」が、ここについに現象化したからである。

換言すれば、まったく純粋性を低減されていない「アルベド侵入」が、今ここに成就したのである。本来は実現不可能であるはずの「純粋なアルベドの侵入」が叶えられたのである。

これを反対に考えれば、事情が分かりやすくなるかもしれない。

つまりここで成就したのが、理性的に理解できる範囲での「許し」であったならどうだろう、と。

それは要するに「純粋性を低減されたアルベド自体」であり、結局「ごく一般的なア

ルベド侵入の一例」に過ぎない。

そんなものを実現したところで、イエスは、人の子の名にも、救世主の名にも値しないだろう。

もしイエスが、まことの「人の子となった神」であるならば、それこそ彼は「神にしか出来ない許し」を現実化させなければならない。

それは真なる「絶対の許し」であり、「絶対にその手から零れる者のない許し」である。

そして、この地上において「絶対」の器となりえるもの、有限なる人間にとって「絶対」の器となりえるものは、ただ一つしかない。

それが「狂気」である。なぜなら狂気とは、良くも悪くも、我らが人間社会を構成する「人間理性」の限界を、完全突破した心境だからである。

だからこそ、この世に「純粋」「絶対」を降ろしてくるためには、人はどうしても「狂気」の心境に参入しなければならないのだ。

罪人の救世主、イエス

イエスは、確かにそれを行った。それは神的なエネルギーがイエスの魂を高め、彼の魂を「神聖なる狂気」の心境まで登頂させたからこそ出来たことである。

そして、この狂気が「どこまでも相手を許す」競技会において、幾重にも連なるハードルを、ことごとくクリアさせた。

そのクリアの証拠となるのが、さきの、

「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」

という、まさに「絶対的な許し」の言葉に他ならない。

それだから福音書を読む者は、誰であってもイエスを「人の子となった神」「救世主」「キリスト」として、衷心から承認することになる。

それは承認すべき相手が「これほどまでに、人の罪を許しきれたイエスだから」心置きなく出来ることである。

つまり福音書の読者は、一様に次のように思うのだ。

「このイエスという人の許しは絶対のものだ。この人に許しきれない罪はない。

この人だったら、こんなにも罪深い私であっても、許してくれるだろう。少なくとも彼だけは許してくれるはずだ。この神のごとき『許しの人』だけは」

そして、このような感情から逃れられる読者は――福音書に書かれていることが、正確に伝わったならば――誰もいないのである。

そうであるならば、イエスの許しは、『新約聖書』が残存するかぎり、現代においても「絶対の許し」たりえるし、「絶対に零れる者のない許しの器」たりえるのである。

こうしてイエスは、罪人たちの救世主、罪人たちのキリスト、罪人たちのための「人の子」となったのだった。

第２章　メシアの類型

（１）アルベドとルベドの狭間で

アルベドの表現者としてのイエス

第１章の叙述により、私たちには「イエスが表現しようとしたものが、一体何であったか」が分かってくる。

すなわちイエスの教えは、基本的には「アルベドの座標内容」を表現しているものに他ならないのである。換言すれば、イエスが表現ようとしているのは「座標９」の内容なのだ。

私など、イエスの隣人愛の根源がどこにあるか、と問われれば、

「それは、アルベドの自他一体の状態にある」

と即答して構わないと思っている。

あまつさえ、十字架上の死で示した「絶対の許し」に至っては、まさにアルベドの「救済」そのものではないか。

しかもアルベドは、霊的な母性原理でもある。そうであるからこそ、イエスによる「絶対の許し」は、見事なまでに「すべての罪を受け入れる、母性的包容力」の一表現となっているのだ。

ルベディアンとしてのイエス

いや、そうは言っても、イエスは「アルベディアン」ではない。

イエスは飽くまでも「ルベディアン」であり、ルベドの悟りを悟得している者である。そうでなければ、座標５にあたる良識（二元論的な倫理）の尊重など説けるはずがない。

良識は、ユダヤでは要するに「律法の完成」にあたるが、イエスはこの「律法の完成」について、次のような言葉を口にしているのだ。

「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである（マタイ）」

このように言うイエスは、明らかに「座標５」の大切さを知っている。

そして、アルベディアンは「座標９」だけを尊重するが、ルベディアンは、すべての座標を、均等に尊重するのである。福音書全体を見るかぎり、イエスの態度は、おおむね後者に傾いている。

また、マルコやマタイが伝える「人の子が全能の神の右に座り…」というイエスの言葉は、まさに「神との等化」たる、ルベドの悟りを反映している。

事実、これほど大胆なことが言えるのは、誇大妄想狂か、ルベディアンだけだろう。そしてイエスを、誇大妄想狂だと考える人はまずいないのである。

しかし他方、ルベドの悟りの中枢である「無からの創造」の真理を、イエスは、自身の中心的な教えとしては説かなかった。

いや、おそらくは説けなかったのだ。それを説くことを、イエスは神から許されていなかった。

順当なカード

それは仕方のないことだった。イエスの、あの時代における宗教的役割は、明らかにそれとは別のところにあったからだ。

イエスの役割――それは、パリサイ派に代表される二元的倫理（ 座標５ ）と、第二イザヤやホセアに代表される、預言者たちの許しの倫理（ 座標６～８ ）を、総合的にまとめ上げることだった。

換言すれば、自我の確立から、アルベド侵入の流れに「次の過程」を付け加えることだった。

まず座標５が、人々の心に根源苦（ 罪の意識 ）を浮かび上がらせる。そして、その罪の意識に対して、座標６～８が「罪の許し」を予感させる。

とすれば、次に来るのは、やはり座標９の「絶対の許し」の現実化であるべきだった。

そしてイエスは、十字架上の死によって、実際にこれを行った。

つまり彼は、絶対的な許しの言葉である「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」という台詞を、その死のまぎわに言い放ったのだった。

これは、段階的に進展していく「ヘルメスの杖」が、そのとき順当なカードを切ったということである。

だから座標５，６，７，８のあとに、イエスによって座標９（ アルベド自体 ）が表出されたこと。それはタイミング的に、いたって順当なことなのである。

メシア待望論

ここでちょっと、視点を逆にしてみよう。

イエスの側ではなく、民衆の側が、座標９の「アルベド自体」の発現を望むこと――これはユダヤの宗教史の中では「メシア待望論」と呼ばれている。

このメシア待望論が、イエスの時代には、多くの人々の胸のなかで「その実現はまだか、その時が来るのはまだか」という、焦りにも似たかたちで高まりを見せていた。

しかも、二元的倫理（ 座標５ ）の表現である律法精神は、すでに教えとして爛熟して倦んでいた。その本質は輝いていたが、実践面において淀んでいた。

すなわち律法精神は、きわめて重度の形式主義に堕してしまい、もはやそれは真理にとっての敵、障害の様相すら見せ始めていたのである。

たしかに預言書（ イザヤ書、ホセア書など ）は読まれていたが、多くの者たちにあって、預言者たちの心は、いまや忘れ去られようとしていた。

換言すれば、形式的な律法主義によって、預言者たちの「許しの精神」が、どこかに捨て去られようとしていたのだ。

後年あんなにもイエスが痛罵した、かのパリサイ人の形式主義を思い出してほしい。あれこそ、腐敗した二元的倫理の成れの果てであろう。

言うなれば、ヘルメスの杖という、歴史を地の生地にして刺繍されるべき織物は、今やその図案が、ひどく歪み始めていたのである。

これを「時が満ちていた」とも表現できるだろう。というより、むしろ時は「満ち過ぎていた」とも言える。そうした爛熟の時代に、ようやくイエスが現れることになる。

アルベド自体を表現するイエス

このままでは、座標５の二元的倫理も、座標６～８の預言者倫理も、その宝物のような価値を失って、散逸してしまう。イエスにはそのように思われた。

それを阻止するためには「ヘルメスの杖」が求める順序に従って、ここで座標９の「アルベド自体」を発現させなければならない。

なぜなら、そうすることで、アルベドの「絶対の許し」が、二元的倫理や預言者倫理に、再び生命（ 真の役割 ）を吹き込むことになるだろうからだ。その重要性には計り知れないものがある。

――かような「アルベド自体」を発現させずして、突如ルベドの内容を顕すこと。それは、神の計画性からすれば、明らかに一足飛びのエラーである。

いや、もちろん「まったくルベドの内容を説いてはいけない」というのではない。現実にイエスも、部分的にはそれをしばしば説いている。

とはいえ、それが教説の中心になってはならない。それをすればまた、歴史を地の生

地にして刺繍されるべき「ヘルメスの杖」という曼荼羅模様が歪んでしまう。

だからこそイエスは、あのようにアルベド的隣人愛を説いた。アルベド的な許しを説き、ついには十字架上で「絶対の許し」を顕した。

そうしてイエスは、十全なる「アルベド自体の体現者」となったのである。

（２）奇跡の源泉

変換使用されるポテンシャル

では、イエスの「ルベディアンとしてのポテンシャル」はどうなったのか。その未使用分の能力はどこへいったのか。

当然といえば当然だが、ルベディアンの心的エネルギー量は、アルベディアンのそれよりも、はるかに大きい。これは読者も納得できることだろう。

ゆえに、イエスの仕事が、ほぼ「アルベドの座標の発現」に限定されたのであれば、単純な引き算によって、ここに大量の「イエスの余力」が計上されることになる。

では改めて問おう。その余力分のエネルギーはどこに行ったのか。

それはおそらく、イエスの「奇跡を起こす力」と「宗教的感化力」へと転換されたのである。それが私の見立てだ。

そして私は、イエスがこの余力のエネルギーを使うことによって、かの「復活の奇跡」を執り行ったのだと考えている。

もっともイエスの「復活の奇跡」は、イエス自身が、意図的に成し遂げたものではない。それは天なる父の采配によって行われたことである。

イエスはどちらかというと、復活を「させられている」観すらある。その点でイエスは、エネルギー運用の主体とは言いかねるだろう。

ならば率直にこう言ってしまえばよい。イエスの復活に際しては、天なる父による「余力エネルギーの代理的運用」があったのではあるまいか、と。

つまり、まず前提として、イエスが使用できるはずの「ルベド的エネルギー」は、その大部分が、霊的世界における「ルベドの座標」に貯蔵されていた、ということである。

そのように「余力のエネルギーにしてルベドのエネルギー」は密かに貯蔵されていた。イエスが十字架で死ぬまでは。

そして、このイエスの死こそが、あらかじめ決められていた、エネルギー使用のためのトリガー（引き金）だったのだ。

したがってイエスが実際に死ぬと、それを知った「天なる父」がすみやかに、そのルベド的エネルギーの代理的運用を行った、そういうことになる。

つまり、そのとき「天なる父」は、これまで保存されていた「ルベドのエネルギー」を持ち出し、それを「復活の奇跡」成就のために配当したのだ。

これによってイエスは、刑死から三日後に甦ることになった。すなわちイエスの「死と復活」が成就したのである。

これが私が提唱したいと思っている「余力エネルギー運用仮説」のあらましである。

私がこのような仮説を立てたのは、イエスの「死と復活」が、図式的に、ルベドの内容と完璧なまでに合致するからだ。

死と復活――まずそれは、一つの象徴として見れば「死というニグレド的暗闇から立ち上る、甦りのルベド的曙光」と解することができる。

これを換言すれば「死からの生命の甦り＝無からの存在の創造」となるだろう。要はそれは「無からの創造」であり「クレアーティオ・エクス・ニヒロ」だということである。

とすれば、イエスの「死と復活」には、たしかにルベドの中枢的内容が秘められている、ということになるのだ。

もちろんそこには、それに相応しい性質、相応しい量のエネルギーもまた、秘められていたはずである。

すさまじい宗教的感化力

イエスの死を境にして、天なる父が「余力エネルギー運用」を始める。そうしてルベドのエネルギーが、一気に地上に放出された――

右のような事情により、ここに歴史的に類例を見ない、恐ろしいほど強烈な「宗教的感化力」が働くことになる。理屈ではない、ほとんど盲目的な力が、人々の心をどんどん捉えていく。

そもそも「復活の奇跡」など、どう考えても、実際にはあり得そうもない話である。

ところが、一度はイエスのもとから逃げ出した弟子たちを手始めに、驚くべきスピードと感染力をもって、「復活の奇跡」は、主にローマ世界に生きる人々に「確かな事実」として伝播されていく。

しかも伝播されるほどに、民衆に対し「それは真実である」という、強い確信を増し与えていく。彼らは不可解なまでに、イエスの復活を「本当にあったこと」と信じて疑わないのだ。

私自身はといえば「死後のイエスが、本当に肉体をもって、人々の前にその姿を現わしたか」については、さしたる関心がない。他人に、それを信じろと強要する気にもなれない。

ただし、そこに「ルベドのエネルギーの充当」があったとすれば、イエスの復活のエピソードが、人々に「真実」として受け取られたことは「大いにあり得るだろう」と考える。

なぜならルベドとは「無からの創造」であり、これを人間的な象徴に焼き直せば、「死と復活」という奇跡的なシチュエーションに、いくらでも転換できるからだ。

虚ろな墓から、光輝く神人が現れる様は、まさに「無からの創造」のアレゴリーに他ならないだろう。

要するに、まず最初に力があったのだ。充分なエネルギー量を保持している力が。そしてその力は、ルベド・エネルギーであるがゆえに「死と復活」の匂いをしていた。

それは、そのエネルギー量と匂いを保ちながら「イエスの復活ストーリー」として、人々に伝わっていった。

だからこそ人々は、やたらスンナリと、その「イエスが生き返った」という伝聞を信じることが出来たのである。

そしてこれが、初期キリスト教の「ほかに類例を見ないほど、強烈な宗教的感化力」として歴史に記録されることになる。

もちろん直接の弟子たちには、その個々人に「霊的な」なんらかの現象が臨んだのだろう。

しかし「イエスの復活」は、そのような個々人の霊体験を超えて、ローマ世界全体を巻き込むような「集団的真実」になったのである。

そうであれば、ここにはやはり、全地を覆うような「ルベド級の、心的エネルギーの解放」があったのだと思う。

なにしろ場合によっては、その真実を守るために、信徒が自分の命を捧げるところまで行ってしまうのだ。むろん私は、あの数限りない、クリスチャンの「殉教」のことを言っているのである。

これは、そうそう起こり得ることではない。とすれば、やはりそれは、ルベド級の心的エネルギーが働いてこそ、初めて成立した事態と言えるのではないだろうか。

能力的にもアルベディアンの神秘主義者たち

このような事態は、仮にイエスが「純性のアルベディアン」であったならば、決して起こらなかったことであろう。

イエスの「愛と許し」の教えは、当然のことながら、後世に現れた、幾百の神秘主義者（ アルベディアン ）たちの教えとも共通していた。

というのも、神秘体験（ アルベド ）に内在する「自他一体」や「母性的寛容性」の要素は、イエスによる「愛と許し」の根拠でもあるからだ。

しかしながら、そうした神秘主義者たちの中に、イエスほどの影響力、感化力を持った者がいたかといえば、その答えは明白に「否」だった。

イエスの場合、説教者としてはアルベディアンであっても、そのポテンシャル（ 潜在能力 ）では、ルベディアンに相当していた。それは先述したとおりである。

それに対して神秘主義者たちは、その教説内容がアルベド的ならば、またポテンシャルのほうでも、アルベディアンのそれを超え出ていなかったのだ。

ここに神秘主義者たちが、イエスほどの影響力や感化力を、持ち得なかった理由が見える。アウグスティヌス、クザーヌス、エックハルトなど、みなそうである。

ただ一人イエスのみが、愛と許しを中心的に説きながら、その実人生においては「死と復活」というルベド的な奇跡を成し遂げた。

そうして彼は、キリスト教という、世界で最も信者数が多い普遍宗教を作り上げた。

こんなことは、イエスが「その本性においてルベディアン」でなかったなら、絶対に成し遂げられなかったことだろう。

（３）私という「人の子」

救世主然としたイエス

アルベドの倫理的な現れである「救済」、つまり「絶対の許し」は、それを体現したイエスを、救世主として明瞭に印象づけた観がある。

なにしろイエスは、人類を「罪悪感という苦しみ」から救ってくれるのだ。いわば、もっとも強く救いを求めている人間を救ってくれるのが、イエス・キリストなのである。

それはもう「救世主」「キリスト」「メシア」といった称号に、ピッタリと「ハマっている」とさえ言えるだろう。

ところがだ。ルベディアンにとっては、「救済」や「絶対の許し」は、ヘルメスの杖における、数多ある座標のうちの一つに過ぎないのである。

そして既に述べたように、アルベディアンが「座標９」だけを尊重するのに対して、ルベディアンは、すべての座標を、均等に尊重する。

ゆえにルベディアンは、意図的にそうしない限り、その教えを「救済」「絶対の許し」に集中させたりはしない。

つまり彼は、アルベド的教えに対し、他の座標とフラットな重要性しか与えない、ということだ。

よって、ルベディアンは、こと「救済」に関して、さほど強くない印象しか、人々に与えないことになるだろう。

これは、決して小さな問題ではない。元来はルベディアンこそ、「無からの創造」を認識した、真なる「人の子として生まれた神」なのだからだ。

ルベディアンである彼こそは、真のメシアであり、真の「人の子」である。

しかし格別「救済」に肩入れしない彼のあり方は、イエスに比べると、救世主（救済者）としての印象が、何割か減で薄まってしまう。そのような事が考えられるのである。

私という救世主

率直に言って、わたくし正道はルベディアンである。

そして、イエスの「救済」「絶対の許し」に特化したあり方に対して、私には「偏向したキリスト教に、均整な宗教的フォルムを与える」という使命が授けられている。

すでに西洋の宗教史という布生地には、イエスによって「アルベド自体」までの刺繍が、縫いつけられている。

よって「ヘルメスの杖」という曼荼羅を完成させるためには、つぎに、誰かがそこに「ルベド」という模様を、付け加えなければならないのだ。

その刺繍が、この私に託されている。

私は、西洋と東洋の接点である日本にあって、「ルベド」という模様を、キリスト教（＝西洋宗教史）に縫い付けなければならない。

そうして「ヘルメスの杖」という曼荼羅とともに、キリスト教をも完成させなければならないのである。

だからなおさら、イエスの時代を回顧して、もう一度「救済」や「絶対の許し」を強調している場合ではないのだ。それではヘルメスの杖が、現代における「順当なカード」を切ったことにはならない。

したがって、この方向性は棄却されるべきである。

そして、今どんなカードを切るべきかは、すでに分かり切っている。

現代における順当なカードとは、まさしく「ルベド自体を、この世に発現させること」に他ならないのだ。私はこれを行わなければならない。

だから、同じ「人の子」であっても、イエスと私とでは、その仕事の印象が、大きく異なってくる。それはほとんど「対照的なまでの違い」である。

ルベドを表現するために

私は、キリスト教を完成する者として、どうしても「ルベディアンの教え」を説かねばならなかった。

そうすることによって私は、既存のキリスト教の中にある、矛盾の数々を、解消しなければならなかった。

つまりキリスト教の教説のうちにある「腑に落ちない部分」――これに悩んでいるクリスチャンたちに、

「ああ、これはそういう事だったのか」と納得してもらう必要があったのである。

それというのも、まさに、その「納得」の感情こそが、キリスト教の「完成」には不可欠だからである。

それも当然のことで、納得することも出来ないまま、誰かに「キリスト教が完成した」と言われても、その言葉を素直に受け入れられる人は、まずいないだろう。

ゆえに「納得の提供」は、キリスト教の完成者の主要な責務なのである。

これはイエスには出来なかったことである。というより、彼の役割ではなかった事で

ある。

イエスは「アルベドの表現者」になることを命じられた者であり、他方の私は「ルベドの表現者」となることを宿命づけられた者であるからだ。

そして、イエスが「死と復活の奇跡を起こす力」と「宗教的感化力」に用いた「ルベドのエネルギー」は、私の場合は、まさにこの「ルベドの教説形成のためのエネルギー」として、使い果たしてしまった。

したがって、私の場合は、この「福音書シリーズ」を書きえたこと、「ヘルメスの杖を、ルベドの段階まで解き明かしたこと」自体が奇跡である。

ということは、この「福音書シリーズ」が、人々に宗教的感化力を与えないならば、私はほかに、いかなる宗教的感化力も持ち得ない、ということである。

誰に言われずとも、個人的にそのように思っている。

もっとも、もしかしたら超新星の悟りと霊力が、その枠を肯定的に崩すのかもしれないが……

（ 右は初稿執筆時点での考えである。実際には、第八（ 十七 ）福音書で語られるような、エピファニーの奇跡が起こった ）

真理探究の完遂

それはさておいても、こうは言うことが出来る。キリスト教圏において、この「福音書シリーズ」以上に、包括的かつ、超越的な宗教的真理を説いた書はないのだ、と。

いかなる宗教者も、いかなる哲学者も、ここまでの真理を、世に現す（ 著す ）ことは出来なかった。

率直に言えば、アウグスティヌスにしても、トマス・アクィナスにしても、カントにしても、ヘーゲルにしても、私には、その仕事が「真理探究の中途挫折」にしか見えないのだ。

この点において、本シリーズは、たしかに「奇跡」の名に値する。

そして、ここには神秘的現象（ 私が一度死んでから甦るなど ）に依らない、ニュートラルな宗教的感化力を、期待することが出来る。

なにしろ「福音書シリーズ」は、二千年をかけて歪められた「キリスト教という世界宗教の偏向性」を矯正することが出来るアイテムなのだ。

このアイテムは、長年「宗教的歪み」のなかで呻吟していたクリスチャンたちを、解放、救済することが出来る。

これは紛れもなく救済の業であり、救世主の名に恥じない仕事であろう。

とはいえ、もちろんこれは、イエス的な意味における「救世主の降臨」ではない。

しかし、それに等しい意義をもった救世主、あるいは「人の子」の降臨ではあるだろう。私はそれを確信してやまないのである。

第３章　死者の復活

（１）法廷への召喚

最後の審判を下す前に必要なこと

最後の審判は、キリスト教における、終末現象の最大要件の一つである。

そして私は、人の子の権威をもって、今ここに、その「最後の審判」を、実際に執り行おうと思っている。私には、これを行う権利と、また義務とがある。

そして、この特殊な裁判を開廷するためには、どうしても「最も重要な参考人」を招致する必要がある。

そう、クリスチャンならば誰しも「絶対に裁判に来席すべき、最重要参考人」として「ある人物」に心当たりがあるはずなのだ。

彼はすでに過去の人である。おまけに、はるか二千年も前に亡くなっている。

しかし、その過去の言動は、今なおクリスチャンたちの生活に、甚大な影響を与えている。彼の存在を無視しては「最後の審判」など、到底下せはしない。

では、この重要参考人とは誰か。

むろん、それはイエス・キリストのことである。

このイエスが「私はすでに、遠い過去の人間になっている」という理由によって、私たちの法廷に臨むことを拒んだとしよう。

その場合わたしは、どんな手を使ってでも、イエスを、その遠い過去から、引き戻さなければならない。

あるいはまた、イエスが「私はすでに死んでいるのだ」という理由によって、この法廷に臨むことを拒んだとしよう。

その場合わたしは、どんな手を使ってでも、イエスを、その死の世界から、この生の世界へと引き戻さなければならない。それは即ち「死者の復活」であろう。

裁判官から被告人へ

ところで最後の審判は、普通は「終末に再臨したイエス・キリストが、全人類を裁くこと」として理解されている。

つまり「審判者イエスが是認した者は天国にのぼり、否定した者は地獄に落とされる」と。

しかし、それは「イエスが自分自身では罪を持たない、絶対の正しさを持つ者である」という事前の設定があってこその、法廷判決シーンである。

つまり「絶対に正しいイエス」が下すからこそ、その裁きは最終的なもの、すなわち「最後の審判」となるのである。

ところがイエスは、私を通して、本当の意味における「人間」となってしまった。

もっと明確に言えば、私の「第五福音書」を通して、その人生に陰影を伴った「人間らしい人間」となってしまった。

まことにそうなのだ。彼はそこで「原罪を持ち、ゆえに毎日のように過ちを犯しうる」人間になったのである。

そうであれば、イエスが人類を裁くとしても、それは到底「最終的な正しさ」という水準には程遠い。

そして、そんな程度の正しさによる裁きでは、何としても「最後の審判」という名に悖るだろう。

だが、これは悲しむべき事だろうか？

いや違う。重ねて違う。これは決して悲しむべき事などではない。

まず最初に言いたいのだが、もともと「無原罪のイエスの正しさ」などは、しょせん後世の信者によって生みだされた虚構に過ぎないのだ。

とどのつまり、過ちを犯さない「人間」などいはしないのである。そんなことは、私に言われずとも、イエス自身が、誰より衷心から分かっているだろう。

無原罪の正しさ――彼は、そんな虚構の上に建てられた正義で、人々を裁きたいなどとは思っていない。私には、それが分かる。

むしろイエスが欲しているのは、自分自身を裁くことである。

人間である自分が、西暦という「イエス・キリストの時代」のなかに、何をプラスの意味合いで与え、何をマイナスの意味合いで与えてしまったか。それを、一大清算的に知ること。

つねに真理を求めずにはいられないイエスは、それをこそ欲しているのだ。

だから私は、今それをイエスに教えようと思う。そのためにこそ私は、彼の死後二千年も経った、この時代の「法廷」に彼を招致しようと思うのだ。

そう、重要参考人どころか、何となれば、この裁判の被告人として。

死者イエス・キリストの復活

私の中でイエスは甦る。私を通して、今イエスは再生する。

と言っても勘違いはしないでほしい。私は自分のことを「イエスの生まれ変わりであ

る」などと主張する気は毛頭ないのだ。

しかし、気脈が通じ合うというか、イエスのことを思うと、彼の思考パターンや、感受性の癖のようなものが、不思議なぐらい、自然と自分の中に、スッと入ってくる感じがする。

平たく言えば、たぶん私とイエスは似ている。とくに、その欠点が似ている。

本当にイエスが人間であるならば、当然彼にも、人格の影、あるいは人格の澱（ 底に沈んだカス ）のようなものがあるはずだ。

そして、その影や澱のような部分こそが、イエスと私とはよく似ているのである。

だから私は、わが事のように、イエスの内面を描写することが出来る。イエスの心を描写することが出来る。

もちろん「そんなイエスはイエスではない」と批判されるのは構わないし、当然そういう批判はあるだろう。それは覚悟の上である。

しかし、私の気持ちのなかで完結している話としては、私は確かに、イエスのことを自己告白のように描くことが出来るのである。モノローグ（ 独白 ）として、彼の気持ちを語れるのである。

このような事が出来ることを、私自身は、ただ「天からの恵み」のようなものだと解釈している。

それ以上に穿って考えることは、あまり生産的ではない。きっと考えるほどに、誤解と非難を生むだけだろう。

私はただ、再臨のキリストとしての「役割」を果たせばいいのである。再臨のキリストが、イエスの生まれ変わりである必要性、必然性は、特にないと思われる。

無原罪の人間などありえない

あらためて言おう。私とイエスは似ているところが多い。

だから、教会がイエスのことを「無原罪の存在」「無過誤の存在」として扱うのを見ると、心から「冗談じゃない！」と叫びたくなる。

自分と似た、間違いが多い、いたらない人間が、こともあろうか「過ちを犯したことがない」がゆえに「罪を持たない」存在として扱われるとは！

これは絶対に許されることではない。そんなことをしたら、ものの道理は、大きく歪んでしまうに決まっている。

そうなるに決まっている。あばたもえくぼの騒ぎではない。それは、もっとずっと大きな悲劇を呼び込む火種となるだろう。

イエス自身だって、その死後のおける「自分の扱い」を見たら、やはり「冗談じゃない！」と叫ぶはずだ、

「私にだって過ちや罪はある、そんなの当たり前じゃないか！」と言って。

ところで、そもそも過ちや罪深さの根源にあるのは「虚無」である。

この「虚無」こそが原罪であり、この虚無から、悪と過誤とが派生する。そうして、その悪と過誤とから「罪」が生まれるのである。

となれば虚無は、当然のこと、一見すると嫌悪感をそそるものであるだろう。

しかし、そんな虚無は決して「マイナス要因だけを与えればいい」ような対象ではない。

なぜなら、かかる「虚無」なしに、創造神が存立することは出来ないからだ。それは創造神を構成する、重要なエレメントの一つに他ならないのである。

このことについて私は、第三福音書において、雄弁にその詳細を語った。「座標 10 ルベド」の項においてだ。

すなわち、創造神とは「無からの創造」であり、「虚無からの存在の創造」なのだから、そこには「虚無」という要素が、何としても不可欠となるのである、と。

ゆえに人は、原罪（ 虚無 ）を持ったままで神になれるし、もっと言えば、原罪を持っていなければ、神になれないのである。

しかし、今はまだ、このように感情を荒げる段ではないだろう。少し表現が前のめりなってしまったことを、読者に詫びなければならない。

とりあえずこれからは、私の個性を通して、それに類似していると思われる「イエスの人なり」を振り返ってみたいと思う。

（２）「美＝真理」の人

芸術家的宗教家イエス

福音書を読んでいて、私がつくづく思うのは「イエス・キリストは、芸術家タイプの宗教家なのだな」ということである。

実際、私の目に映るイエスは、本能のレベルで、美を追及せずにはいられない人間だ。

極端な表現をすれば、彼はその心の奥に「美＝神」「美＝真理」という単純な図式さえ、確固として持っているような感じがする。

ところで、美とは何だろう。

美そのものを指し示すことは出来ないが、さしあたって、それは心を震わせる感動のことである。感動こそが、そこに美があることを、私たちの心に教えてくれる。

そしてイエスの倫理的判断は、この感動の在り無しによって、その是非が測られている、と言っても過言ではない。

この点、ユダヤ教（ 旧約の倫理 ）の中で「真理」とされている事柄であっても、少しも例外扱いはされない。

つまり、いかに伝統的な権威を持っていようとも、それがイエスの中で感動を生じさせなければ、それはもはや彼にとり「単なる不条理」として扱われてしまうのである。

そして、かかる不条理は、イエスによって、実にアッサリと排斥、棄却されてしまう。

いや、それどころの話ではない。

というのもユダヤ教の中には、人々から真理として尊重されながら、そのじつ醜さすら感じさせる「真理」すらあるからだ。

こういった括弧つきの「真理」に出会ったときのイエスこそ熾烈だ。

つまり、かかる「真理」が、これまで不当に持ち上げられていた分だけ、その「真理」への憎しみもまた、余計に勢いづいて赤々と燃え上がるのだ。

宮清めの場面など、イエスに対し「なにも、そこまで怒らなくても」と言いたくなる人も多いだろう。

だが、それは仕方ないのだ。なぜなら、醜さとは美の敵であり、かつまた芸術家の敵だからである。

デリケートで気性の激しい芸術家にとっては、その敵に対する「憎しみの大噴出」は、ごくごく自然な感情的反応だと言わなければならないだろう。

安息日の規定と戦うイエス

醜さすら醸しだす「真理」を前にしたイエスの反応――その良い具体例となるのが、「安息日には、仕事をしてはならない」という、ユダヤ教の規定への立ち向かい方である。

ただし、ここで言われる「仕事」は、私たち日本人の通念にある「仕事」とは大いに異なっている。

そこにはなんと、人助けという行為までが含まれているのである。この時代のユダヤ人は、そんなことまで「仕事」と呼ぶわけだ。

よって、信者がユダヤ教のなかで真理の側に立つためには、その信者は、安息日に苦しんでいる人がいても、この人物を黙って見捨てなければならない。

むろん、それは彼が救済という「仕事」をしてはならないからである。一貫して律法学者たちは、そのように言う。

しかし、その倫理的なあり方は、決して人の感動を呼ばない。

いや、感動を呼ばないどころか、イエスの中では、むしろ醜く見える。醜くくて悪いものに見える。したがって自動的に、それは芸術家イエスの敵となる。

イエスの中で、彼の「美」は反対に、安息日についてこう言う。

「たとえ他人から責められても、誰かのために働いてしまう、その心を忘れないでほしい」

なぜなら「そこに感動があるから。美があるから」と言う。

イエスも、この囁きに同意する。だから彼は、正面きって、安息日の規定と戦うことになる。

イエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた（ ＝問いかけた ）。

「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか。」

彼らは黙っていた。すると、イエスは病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになった。そして〔律法学者やファリサイ派の人々に〕言われた。

「あなたたちの中に、自分の息子や牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」

彼らは、これに対して答えることが出来なかった。

『ルカによる福音書』より

これと似たような記事は数多とあり、四つの福音書の全体を通して、イエスは何度となく、安息日に救いの業を為している。

そして、その度ごとに律法学者やパリサイ人を怒らせている。イエスにとっては、それで全く構わない。

美のためならば不幸も厭わず

ところで、基本的にイエスの美は、自己犠牲的な愛の姿を、その核にしている。

私も、これが世界で一番美しいものだと思う。この愛のすがた以上に、人の心を震わせるもの、感動を与えるものはないと思う。だからイエス自身も言うのだろう。

「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない（ ヨハネ ）」

仏教的な利自即利他（ ＝自分の利得と、他人の利得の共存 ）の教えは、たしかに筋が通っている。それは誰もが幸せになれる、唯一の道なのだろうとも思う。

けれども、それはエレガントで、静的で、心地よすぎる。そして、その円満さの分だけ、美のインパクトとしては、弱いものしか持ちえない。

逆に、イエスの死など、円満とは真逆の、ほとんど不幸の極みと言ってもいい状況だ。

しかし、その際立って自己犠牲的な姿は、これを観る者を「猛烈に」感動させる。そこには恐ろしいほどの美がある。究極的なまでの美のインパクトがある。

だから私の中でも、あの陰惨きわまりない「イエスの十字架」は、全面的に「是」とされる。

それがいかに陰惨な見た目を持っていたとしても、そこに込められた崇高な自己犠牲のために、それは確かに「美しいもの」へと高められているからである。

正直なところ、それが美を呼び込むものであるならば、私は不幸をも尊ぶだろう。

イエスもまた、自分が幸せ（ 円満 ）になることなど、一切考えていなかったのではあるまいか。なぜなら芸術家にとっては「美に殉じること」こそが至上の、唯一の人生のテーマだからである。

このテーマさえ果たせるなら、どんなに不幸に見える人生であっても、それを生きることは、芸術家にとって「最高の生の充実」なのである。

こうした姿勢は、一般の人たちには、きっと気違いじみて見えるだろう。だがそれも当然で、真の芸術家というものは、まさしく気違いじみた人種に他ならないのである。

さらに深く、芸術家としてのイエスを探る

さらに言うと、芸術家は「感動」というものが、どれほど人間を動かす力になるかを

知っている。イエスもまた、それを心の底から知っていたはずだ。

だからだろう。キリスト教は、仏教ほどには理論的な筋を通すことが出来ないが、その代わりに、異様なまでに人を感動させる。それは人の心を、エモーショナルな状態に導かずにはおかない。

そして、この感動こそがキリスト教に——仏教にはあまり見られない——あの大きく激しい宗教的力動性を付加しているのだ。

それをして「キリスト教は世界に、大波のような『世界を変革する力』を供給している」とも言えるだろう。

これについては、ローマ時代の殉教の激しさを見ただけでも、その力動性の一端が感じられるはずだ。

これを「芸術的宗教だけが持っている、特徴的な力の現れ」だと評してもよい。

ただし「芸術」だから、そこから生まれるすべてが良いものである、という訳ではない。

何事においてもそうだが、そこには当然、良いところと悪いところ、プラスの面とマイナスの面とが両方とも含まれている。

しかも、イエスの場合は、純粋な芸術家とも呼べないのだ。彼の本業は、飽くまでも、芸術的な「宗教家」だからである。そこに、複雑に込み入った問題を生みだす火種が燻っている。

というのも、一流の芸術家よりは、一流の宗教家のほうが、社会に与える影響が大きいものとなるだろうからだ。

となれば、これは私たちとしては、決して無視できない、実にやっかいな火種なのである。よって次の章では、この点を、深く掘り下げて考察していきたいと思う。

第４章　芸術と宗教

（１）芸術家イエスの肖像

芸術家イエスを描いてみる

前章において、私はイエスを「芸術家タイプの宗教家」であるとした。

ところで、一言で「芸術」と言っても、その括りのうちには、実に様々な要素（分野）が含まれている。ごく大きく分けてみても、音楽、文学、絵画ぐらいには、分類しておきたいところだ。

ほかに建築や陶芸、舞踊などもあるだろうが――たとえイエスが大工の息子であっても、本質的には――イエス自身とは、あまり縁がありそうにもない。

ここでは、そのことを踏まえた上で、イエスを無理やり「音楽家、文学者、画家」のカテゴリーに当てはめてみたいと思う。

そうすることで、彼の芸術的指向性が奈辺にあるのか探ってみたいのだ。ちょっとした思考実験だと言えるだろう。

音楽家イエス

まず音楽。イエスが楽器や声楽を嗜んだという話は聞かないが、イエスの人生自体が、私は実に音楽的だと思う。

福音書を読んでいると、本当に、どこかからか音楽が聞こえるような気がする。

この音楽を感じているのは、私一人だけではないのだろう。

たとえば、ヨハン・セバスティアン・バッハの作品に『マタイ受難曲』という名作がある。

これはそのタイトルどおり、『マタイによる福音書』に則って、イエスの受難場面を、劇音楽化したものである。

この大作を創作したときの作曲者について、私は次のように憶測する。すなわち「バッハは、彼自身のイマジネーションによって、イエスの受難を音楽にした訳では『ない』だろう」と。

そうではなく、私は「バッハは、イエスの実人生から聞こえてきた音楽を、そのまま譜面に書きつけたのではないか」と思うのである。

それぐらい『マタイ受難曲』を聴いていると、スーっと「イエスの往時の様子」が、リアルな情景となって眼前に浮かんでくる。そこでは、素材と音楽との乖離が、まったく感じられない。

これは、作曲家イエスがすでに、自分の受難を、無意識裡のうちに、音楽化してしまっていたから――それをバッハが「霊的に聞きつけて」そのまま譜面に書き起こしたから――成立したことなのではないだろうか。

私にはそのように思われて仕方がないのである。

そして『マタイ』の音楽は、厳かでありつつも、ときに甘すぎるほど甘く、ときにセンチメンタルなまでに甘美に響く。

これは、基本が禁欲的なバッハにしては、大変珍しいことなのだ。

彼の、やや形式的なミサ曲（ ロ短調ミサ曲 ）にはないフレッシュな情感。それが『マタイ』にあっては、そこかしこから泉のように溢れ出ている。

きっと仏伝（ 釈迦の伝記 ）を題材にしても、こういう情熱的な音楽は生まれないだろう。

いや、仏伝由来でも、瞑想的で神秘的な調べは生じるだろう。だが『マタイ受難曲』のようにエモーショナルな音楽は、そこからは出てきそうにない。

それはつまり、仏陀の人生そのものが、あまり芸術的ではないということだ。

というのも、仏陀の人生は、その大部分が、円満で静穏だからである。そして人は、円満な人生から感銘を受けることはあっても、感動を覚えることはない。

悲劇の音楽

他方のイエスはどうか。

以前「イエスの生涯」のドキュメンタリーが、テレビで放送されていた。そして、そこでは『マタイ受難曲』が、サウンドトラックとして使われていた。

私はたまたまその番組に出くわしただけなのだが、それこそ一気に、このドキュメンタリーに引き込まれてしまった。はてはクライマックスで涙を流すほどにも。

実際、そうやって映像と音楽が揃い踏みすると、鑑賞している方は、もはや滂沱の涙を流さずにはいられない。

それは多分、もともと『マタイ受難曲』が持ってるドラマ性が、映像によって、なおのこと強調されるからなのだろう。

そして、その涙ごしに私たちは、イエスの人生が、まさに芸術そのものであり、美と感動の粋であることを思い知らされる。そのように言ってよいと思う。

もっとも、その芸術は、明らかに「悲劇」である。当然コミック（ 喜劇 ）ではないが、ヒューマン・ドラマとも言いがたい。そのような呼び名では追いつかない。

明らかに『マタイ受難曲』は悲劇の音楽である。おそらく、芸術性を伝える、もっと

も適切な媒体は、この「悲劇」なのだ。

そしてイエスの人生は、悲劇そのものである。そこに徹頭徹尾、芸術家であったイエス・キリストの姿が浮かんでくる。

文学者イエス

文学者として見れば、イエスは第一に詩人である。

彼が、弟子たちに教えた祈りの言葉（ マタイ６、ルカ 11 ）や、山上の説教などは、疑いようもなく、第一級の宗教詩だと言えるだろう。

また、イエスの足を、髪で拭った女性に対する言葉（ ルカ７ ）も、優しい抒情味に溢れていて詩的だし、姦淫により、石打ちに晒されようとしていた女性に対する助け船（ ヨハネ８ ）もまた、まるで一篇の叙事詩を見るような気がする。

イエスの人生自体、とくにその終盤は、悲しくも美しいポエジーが満ち満ちている。

また、イエスは優れた物語作家でもある。彼のたとえ話は、単なる例示をこえて、よくまとまった短編小説の体裁をなしているからだ。

そして、よく言われる話に「キッチリと短編をまとめられる作家は、どんなに長い小説でもモノにできる」というものがある。

したがって、時代と環境に恵まれていたならば、イエスは長編小説を何冊も発表するような、いわゆる「文豪」になっていたかもしれない。

私も、そのような潜在能力が、イエスには確実にあったものと思うのだ。

画家イエス

それから私は、イエスが「リアルに、画家の才能を持っていたかもしれない」と思っている。

『ヨハネによる福音書』の第８章において、イエスは、かの有名な、

「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」

という言葉を発している。そしてヨハネによると、この発言の前後、イエスは指で「地面に何かを書き始め」「地面に何かを書き続けた」という。

私には、この「何か」というのが、どうしても「絵」のように思われれ仕方がないのだ。

もしもそれが文章であったならば、ヨハネは、その文章の内容を、すぐ私たちに教えてくれていただろう。たとえば「イエスはそのとき弟子たちの名前を書いていた」など

という風に。

それをヨハネは、あえて「何か」という、お茶を濁すような表現をとっている。

それは、この「何か」というものが、後世に伝えるほどの価値もない、単なる「落書きの絵」だったからなのではないだろうか。

地面を見ていると、何となく指や小石、小枝でもって絵を描いてしまう。これは絵を描くのが好きな人間にとっては、とてもナチュラルな行動である。

「大人になったイエスの中にも、ふと落書きに興じるような子供の心が、しっかりと残っていた。成長したイエスの中にも、自由な遊びごころが消えていなかった。

そして、その純真な心が、子供っぽい落書きを、あのようなシリアスな場面でも描かせていた」

こういう風に考えると、私はなんだか、とても楽しくなる。いかにもイエスらしいなあと思う。

そして、こんなことをする人間は、きっと根っからの芸術家気質で、かつ画家としての素質を持っていたに違いない、と思ってしまうのである。

（２）放浪型芸術家イエス

パトロンは「いて当然」

音楽家、文学者、画家としてのイエスを見てきた。こじつけめいた試論ではあったが、このように語ると、読者には、イエスが確かに芸術家として見えてくるだろう。

ただし、芸術家という職種は、その名称自体に、歴史的な変遷を抱え込んでいる。だから一口に芸術家と言っても、決してそれが、ただ一つだけの概念を指し示しているとは言えないのである。

たとえば、芸術家というものが「技巧をこらすだけの職人」だった時代があった。また、芸術家というものが「主君に忠実な使用人」でしかない時代もあったのだ。

では、イエスの場合における「芸術家」とは、どんな内容を指しているのだろう。

そうしてみると、私の目には、イエスのあり方が、十九世紀末の「放浪的、脱社会的なアーティスト」に似たものとして見えてくる。

すなわち、自分の芸術的な追及心にあまりにも忠実なため、それ以外の能力がさっぱり身につかないタイプの芸術家に見えるのである。

そして、この手のタイプに「身につかない能力」の最たるものが「社会性」と「経済性」である。

さきに言っておくと、こういうタイプの芸術家は、自分自身の「芸術家としての価値」を良く知っている。

これが紛いものだと、浅はかな思い込みで終始してしまうが、本物ならばそうではない。確かに彼は、自分自身の価値を「正当に」よく知っているのである。

そのため彼は「誰かが自分の芸術を、経済的に下支えしてくれること」を、ごく当然の摂理であると思ってしまう。彼は心のうちで言う。

「自分の芸術には、実際にそれだけの価値があるのだ。したがって、これを理解し助ける支援者が現れることは、神の目から見ても、至極もっともなことである」

こうして彼の理念のうちに、自然と「芸術家とパトロン」という二者関係が生じることになる。パトロンとは、貧しい芸術家に、財政支援をしてくれる人のことだ。

ワーグナーの場合

実際にこのパトロンを、芸術家がモノにしたことも多い。その良い例が、音楽家のワーグナーの場合だ。

上演に四日かかる、超大作のオペラ、『ニーベルングの指輪』の作曲者として有名なワーグナー。そのワーグナーの経済的能力は、しかし徹底的に破綻している。

何となれば彼は、借金と夜逃げの常習であり、そんな彼をして――もちろん皮肉な意味でだが――借金と夜逃げの「天才」と呼ぶ人さえいる。

ところがワーグナーには、きわめてリッチな、まさに王侯然とした生活を送っていた時期があるのである。それは彼のパトロンとして、ルートヴィヒ二世（ 第四代バイエルン国王 ）がいたからだ。

しかも、その二者関係は、どう見ても、王のほうがワーグナーに仕えているのである。

ワーグナーの方はというと、こちらは自分の「芸術家としての価値」を絶対視している。

だからその気位が、寸毫たりとも揺らぐことがない。たとえ直接王に対峙しても、少しも卑屈になったりしない。

他方、イエスもまた、この点ではワーグナーと同じあり方をしている。

彼はいかにジリ貧のように見えても、ときには大規模な酒宴を開いたりしている。しかも、彼を崇める金持ち（ パトロン ）から出資してもらって、である。

これは余談だが、歴史的事実として、イエスは大酒のみで、かつ大飯食らいだったらしい。そのように周囲から批判されたと『マタイによる福音書』に書いてある。

いずれにせよ、イエスは他人の金を使って、好きに宴を催しているのである。その点に疑いの余地はない。

が、そうだとしてもイエスは、自分の宗教家（ 芸術的宗教家 ）としての価値に、揺るぎない自信を持っている。彼がルベディアンであるなら、それも当然のことだろう。

だから彼は、決して卑屈になったりしない。それどころかイエスは、いざとなれば、金持ちに対して、ほとんど暴言じみたことまで、言ってのけるのである。

「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通るほうがまだ易しい（ マタイ ）」

これを「イエスの出資者」が直接聞いたとしたらどうなるだろう。さだめし彼らは、激しい怒りで、顔が真っ赤になるのではないだろうか。

とすれば、イエスにのなかに「金持ちへの媚び」などは、微塵もなかったと言ってよい。これはまさに「芸術家とパトロン」の関係の典型例ではないだろうか。

ヒモの才能

もう一つばかり、芸術家とパトロンの具体例を見ておきたい。

といっても、こちらは、ワーグナーと比べれば、若干話のスケールが小さくなる。

ここでご覧いただくのは、作曲家ショパンと、女流作家ジョルジュ・サンドの関係である。

ただし、こちらには「ヒモ」という付加的要素が含まれている。

このヒモというのは、女性に貢いでもらって暮らす男のことだ。つまりショパンは、ジョルジュ・サンドのヒモだったのである。

そしてヒモというものは、男のほうに「女に愛される才能」がないことには成立しないものである。

多少詳しく言えば、男のほうに「母性本能をくすぐるような幼さ」と「世話を焼きたくなるような弱さ」が備わっていないと、その特殊な関係が結ばれないのである。

ショパンのナイーブな人なりには、色濃くそれがあった。病弱な体、純真な心、繊細で切ない音楽性がそれである。

女将さん気質のジョルジュ・サンドにしてみれば、そんな魅力的なショパンを、助けずにはいられなかったし、また好きにならずにはいられなかったのだろう。

イエスの女性人気

そしてイエスにもまた「ヒモの才能」は不足していなかった。彼にはショパンと同様の、幼子のような儚さ、守ってあげたくなるような弱さが備わっていた。

イエス自身の言葉からも推察されるように、彼の心は、つねに天国の庭で遊んでいたのである。まるで柔弱で純粋な幼児のように。

きっとそれが「イエスの女性人気」を支えていたのだろう。

ことにマグダラのマリアなどは「イエスに救われたい気持ち」と「イエスを守ってあげたい気持ち」の綯い交ぜの中で、どんどん彼に夢中になっていったのだと思う。

これをイエスの「潜在的な」ヒモの才能と言っても、あながち間違ってはいないだろう。

そして「ヒモと女主人」という関係性は、結局のところ「芸術家とパトロン」という関係性の、親戚みたいなものなのである。

これを芸術家が無意識に引き寄せる、宿命的な関係性と言ったらいいだろうか。

だから、ここでもイエスは、決して女たちに対して、卑屈になったりはしない。というより、卑屈になった瞬間、ヒモは女性に対して、全然魅力的ではなくなるものなのだ。

いわば、十九世紀的、放浪的芸術家のイエスにとっては、女性たちに尽くされることは「当然の権利」なのである。

それこそ、パトロンによる「経済的下支え」に対しても、イエスが同様の権利意識を持っていたように。

そして、その卑屈さの微塵もない、堂々とした姿にこそ、マグダラのマリアたちは、自

分たちを救ってくれる強大な力の「予兆」を感じ取っていたに違いない。

そして、この予兆が現実のものとなったとき、はじめて「女たちの奉仕」は、その対価を支払われることになる。他の何よりも高額高級な「魂の救済」として。

（３）苦境と芸術性の深まり

パトロンを得られなかった時

ここで、パトロンの存在を当然視する「放浪型芸術家」が、しかし現実にはパトロンを得られなかった時のことを考えてみたい。

そうなった場合、芸術家は一体どのような境遇に立たされるのだろうか。

言うまでもなく、そうした場面にあって、放浪芸術家の生活は悲惨を極める。彼は経済面で、それこそ「地獄で血反吐を吐くような苦労」をせずにはいられない。

というのも、自己のアーティスト気質に、必要以上に忠実であること。そのために、生存のために必須な、自身の社会的能力、経済的能力すら、育み忘れてしまうのが、このタイプの泣き所だからだ。

比較的わかりやすい「経済的能力」に話を絞るが、そもそも彼にとっての「経済活動」とは、どういったものだろう。

汚らわしい活動

それは、芸術に関する活動と比べると、一段どころか、もう何段も低いところにある、きわめて雑駁な「どうでもいい」営為である。

それどころか、彼にとっては「経済活動に携わること」、いな「少しでも経済活動に関わること」ですら、疎ましく感じられる。

実際、そういった経済活動は、自分のアーティスト気質をけがす不浄の行為として、何としても厭わしく、また忌まわしい。そのように感じられて仕方ない。

であれば、と彼は思う。そのような汚らわしい営為は、いっそ「下々の者たち」に任せてしまえばいい。

そして、その下々の者たちは、高次の営み（芸術的創造）を守るために、ただ黙って、自分たちの財産を、芸術家である自分に上納すればよい。そのような考えになってくる。

つまりは、先述した「芸術家とパトロン」の関係である。

しかし、ここでは、そうしたパトロンが「現れなかった場合」についての考察を行っているのだ。放浪的芸術家は、そのときどうなってしまうのか、と。

してみると、経済活動を嫌う彼は、そのとき経済活動からも嫌われることになる。

彼の「金を稼ぐこと」に関する無能さは、歳を重ねるごとに、ことごとく明るみに出される。そうしてついには現実に、金も仕事も、どこにもない有様となる。

となれば、もはや「放浪的」ではなく、彼は実際に「放浪」することになるのだ。それによって彼は、まさに経済的に「血反吐を吐くような」思いを味わうことになるのだと言えよう。

そうした苦境のさなかにあって彼は、自分の「芸術家としての価値」だけを矜持にして、ただただ虚空を仰ぎ見ることになる。

晩年のモーツアルト

晩年のモーツアルトなど、まさにその典型だったろう。彼は十八世紀の人間だが、芸術家像としては、すでに十九世紀末の「放浪的芸術家」のそれを先取りしている。

そんなモーツアルトが胸に抱いている「芸術家としてのプライド」は、事実彼が天才であるため、きわめて真っ当なものだった。

ところが、十八世紀における一般的な芸術家像というのは、ほとんど「貴族の召使い」と変わらなかったのである。

つまり当時の芸術家とは、頭と腰を深く屈めて暮らす、どこまでも卑屈な、日陰の存在だったのだ。

そのためプライドの高いモーツアルトは、こうした屈辱的な境遇からの脱出を図らずにはいられなかった。

かくしてモーツアルトは、コロレド大司教という、芸術に無理解で尊大な主人から逃れた。そうして裸一貫になって、市井のステージ（ 音楽ホール ）に向かったのである。

そして幸いなことに、このステージで、モーツアルトは「市民」という名の聴衆を得ることになった。

彼ら市民たちは、演奏会を開くモーツアルトに、お金を払ってくれた。その極上の音楽に対する代価として。モーツアルトはここで、かなりの金銭収入を得ることになったのだ。

そうしてしばらくの間、ウィーンの音楽界を、華やかな「モーツアルト・ブーム」が席巻することになる。

しかし市民たちというのは、ブームが過ぎてしまえば、モーツアルトを支える義務など、少しも持っていない人たちでもあった。

もしも彼らが「パトロン」であったなら、もう少しぐらいは、お金と義理とを提供してくれただろうに。

しかし市民たちは、そのどちらも、大して持ち合わせていなかった。そのためモーツアルトは、あっという間に、経済的苦境に立たされることになった。

グリム男爵のアドバイス

なにしろ十九世紀を先取りした、放浪的芸術家のモーツアルトである。まともな経済観念など、もともと持ってはいなかったに等しい。社会的礼節に関しても、かなり弱いところがあった。

時期的に少しずれるが、そんなモーツアルトの姿を、傍近くで実際に見ている人がいた。グリム男爵という貴族である。

このグリム男爵が、モーツアルトの父親に、次のような手紙を送っている。

「あなたの息子さんは、あまりにも人を信じやすく、積極性に欠け、騙されやすく、〔現実的な〕立身出世に無関心です。

当地で頭角をあらわすには、もっとずる賢く、厚かましく、図太くないといけません。

息子さんが立身出世を望むなら、音楽の才能は今の半分でいいですから、世渡りの才能を、今の倍ほども望みたいところです」

一般論としては、まさに正論であり、的確なアドバイスだと言えるだろう。しかし、このアドバイスが「芸術家モーツアルト」によって活かされることは、ただの一度たりともなかった。

結果、晩年のモーツアルトは、自分の芸術家としての価値を確信しながらも、経済的には、極度の貧困に喘ぐしかなかったのである。

苦境の逆説的価値

とはいえ、その苦しみが、皮肉にも、モーツアルトの音楽に、新しい魅力を増し加えることになる。

すなわち彼の音楽は、晩年にいたって、ついに芸術における「至高の境地」に達することになるのだ。もっとも晩年といっても、彼はまだ三十代の若さであったのだが。

事実、この当時にモーツアルトが生みだした作品は「至高の芸術」の名に恥じないものばかりだった。

それらの作品は、以前のものよりずっと陰影に富んでおり、晴れやかでありながら、ときに不思議なくらい切なく響いた。ある箇所では、死者の諦めのような、気が遠くなるほどの、透明感さえ漂わせながら。

それはまさに、極上の霊的音楽だった。

読者にあっては、せめて「クラリネット協奏曲」の第三楽章だけでも聴いてほしい。そこには、晩年のモーツアルト芸術の粋があると言ってよい。

そして、この点からすれば、晩年のモーツアルトは、ある意味で「至福」ですらあった。

というのも、この世に素晴らしい作品を残せさえすれば、芸術家の本懐としては、それ以上に望むべきことは、何もないからである。

これにくらべると、極端な不遇をかこつ事がなかったハイドンなどは、その晩年の作品において、モーツアルトのそれに及ばない、ある種の遜色がある。

すなわち彼の音楽は、モーツアルトに比べると「一抹の物足りなさ」を私たちに感じさせずにはおかないのだ。

端的に言えば、ハイドンの音楽は、晩年のそれであっても、少しも涙に濡れてはいないのである。それはどこか乾いており、私たちの胸を締め付けるだけの「寂しさ」に不足しているのだ。

その点、モーツアルトの音楽は、どこまでもウェットで寂しい。いつでも涙に濡れている。

そのくせモーツアルトの音楽は、その涙を隠そうとして笑っているのだ。だから私たちは、なおさら彼の音楽を愛さずにはいられない。

イエスの苦境と、その逆説的価値

イエスもまた、その死期に近づいた頃には、晩年のモーツアルトと同じような境遇にあった。

すなわち、ゲッセマネの園で捕縛されてからは、イエスの心の恃みは、己の宗教的価値への、内的な信頼感だけだったのだ。

そのとき彼の周りには、パトロン（ 支持者 ）はおろか、最愛の弟子たちまでが、いなくなってしまっていた。

それはまるで、放浪的芸術家が「本当に放浪しなければならなくなったとき」のようだった。

イエスは今や、誰よりも孤独だったし、誰よりも不遇なシチュエーションを甘受しなければならなかった。

しかしイエスは、その絶対的苦境のなかで、己の「人生芸術」に、新しい魅力と陰影、そして底知れぬ深みを付け加えることになる。

それは、それまでの「奇跡を起こして民衆に歓迎されるイエス」「敵対者を言い負かす強いイエス」には、決して無かった要素の付加だった。

すなわち、ゲッセマネでの捕縛から、十字架までの道のりにおいて、イエスの言動のすべては涙に濡れることになる。

イエスの目は晴れやかに輝きながら、同時に切ないほど蒼白く翳る。彼の祈りは、死

者の諦めのように透明になる。

それはまさに、晩年のモーツアルトを想起させるような魅力である。だから私たちは、晩年のモーツアルトを愛するようにして、イエスの最後のときを愛する。

事実「奇跡を後ろ盾にして、高邁な教えを説いたイエス」であるだけなら、彼の教えの魅力は、結局「ハイドン的な爽やかさ」の範疇に留まっていたことだろう。

しかしながら、かの不幸なる、ヴィラ・ドロローサ（ 悲しみの道 ）が、イエスの最後の足どりに、晩年のモーツアルト的な魅力を付け加えた。

それは芸術的な宗教家にとっては、至福のことだった。なぜなら、悲劇ではあっても、イエスの十字架は、至高の芸術作品として仕上がったからである。

（４）アリとキリギリス

放浪型芸術家としての気質

モーツアルトにも似た、このような現象が起きたのは、イエスの潜在的気質として、もともと「放浪型芸術家」が存在していたからである。

イエスは、知らず知らずのうちに、自らそれを表明してもいる。彼は言う。

空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。

野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。

しかし、栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように養ってくれる。

まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。

何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのもの（＝経済的充実）はみな加えて与えられる。

だから明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。

これは『マタイによる福音書』第６章からの抄出である。

キリギリス型芸術家

上述の文章を読んだ今、読者諸君にはどうか、イソップ寓話の『アリとキリギリス』の話を、思い浮かべていただきたいと思う。

夏の暖かい時期を、やがて来る冬の寒さを想定しながら、せっせと働いていたアリ。

そのアリを横目で眺めながら「先のことなんか考えたって仕方ないさ」と馬鹿にしていたキリギリス。

誰でも知っているとおり『アリとキリギリス』は、この二つのキャラクターが対比される童話である。

やがて訪れた極寒の冬、アリは屋内の暖炉で温まり、キリギリスは、外気の寒さに震えているか、あるいは雪の上で凍死している。

そして一般に、私たちは、アリの勤労精神を「是」と教えられ、キリギリスの怠惰を「非」と教えられることになる。もちろん私自身もそのように教えられた。

けれども、世界的な偉人であるイエスのマインドは、はたして、アリとキリギリスの、どちらに似ているだろうか。

そう、どう見たって、キリギリスのほうなのだ。

しかも、「働くアリを眺めながら、キリギリスは何をやっていたか」といえば、なんと、悠長にヴァイオリンを弾いていたのである。

もっとも、この「ヴァイオリニストとしてのキリギリス」は、古代ギリシアの原典では描写されていない。

それも当然で、もともと寓話作家のイソップは、紀元前六〇〇年ごろのギリシア人なのである。ギリシア名をアイソーポスという。そして、その頃に、ヴァイオリンなどという楽器は存在しなかった。

したがって「ヴァイオリニストとしてのキリギリス」は、長い時をかけて彫琢された「皆がしっくりとくる」キリギリスの姿なのである。

そして彼がヴァイオリニストであるならば、その身上をもって「芸術家」と呼ぶに吝かではないのは当然だ。

実をいうと、私もまた、この芸術家の化身であるキリギリスに、シンパシー（ 共感 ）を持っていた。

そのため二十代後半に「芸術家である自分も、このキリギリスのように、誇り高く死んでいこう」という内容の詩を書いたことがある。

そして、イエスもまた、そのような気持ちになったことがある人だと思う。

前記の『マタイによる福音書』からの引用、すなわち「空の鳥をよく見なさい」から始まる文章を読めば、それが自然な受け止め方となるに違いない。

資本主義の精神を持たないイエス

とすればイエスは、マックス・ウェーバーが描出した「資本主義の精神」とは、真逆のマインドを持った人物だということである。

資本主義の精神――さほど詳しい説明はしないが、それは『アリとキリギリス』の、「アリ」に象徴されるような精神である。

というのも、経済学者であるウェーバーの著作では、神に愛されんとして、驚くほど禁欲的な勤労に徹する、プロテスタントたちの姿が描かれるからだ。この有名な本のタイトルを『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』という。

そしていま私は「イエスが、このプロテスタントたちに似ても似つかない」と言っているのである。

いや、それどころではない。イエスの場合「働かざる者は食うべからず」と言った、パウロほどの勤労精神すら無かった気がするのだ。

なにしろイエスは、いそいそと働くマルタよりも、ただじっと自分の話を聴くマリアのほうを優遇したのだから。

〔マルタとマリアの姉妹のうち〕マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。

マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、〔我慢しきれなくなって、イエスの〕そばに近寄って言った。

「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが〔これを不公平とも〕何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。

主はお答えになった。

「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

『ルカによる福音書』より

こうしたイエスを見ると、私には「どうにもイエスには、勤労精神への敬意が欠けているのではないか」という疑念がわいてきて仕方がなくなるのである。

これに対して、ウェーバー的「資本主義の精神」は、徹底した勤労意識によって、その骨子が形づくられている。

そして、その勤労意識の権化である「ワスプ」は、歴史上における、経済的強者の代表格となっている。ワスプ（ WASP ）とは、ホワイト・アングロ・サクソン・プロテスタントの略だ。

とどのつまりイエスは、彼らワスプと、真逆の考え方しか出来なかったのである。つまりイエスは、勤労精神に対して、シンパシーを持つことが出来なかった、ということだ。

だとしたら、そのとき予想されるのは、次のような帰結である。

「どんな時代や地域に生まれたとしても、イエスには『経済的豊かさ』を生みだすことは、決して出来なかっただろう。その精神的本質が『放浪的芸術家』であるイエスには」

——

そしてこの結論が、次の「第二部」の論述の前提となるのである。

再臨のキリストによる福音書　6 - I

著　　正道

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社